

- 11th Cong. IPVS, p. 71.
- 45) Martineau-Doize, B. ら (1990). *Anatom. Rec.*, 228 : 237-246.
- 46) Mattsson, S. and Soderlind, O. (1990). Proc. 11th Cong. IPVS, p. 79.
- 47) Muller, G. ら (1988). *Arch. Exper. Vet-med.*, 42 : 1-11.
- 48) Muters, R. ら (1985). *Int. J. Syst. Bacteriol.*, 35 : 309-322.
- 49) 長沢洋二ら (1979). 第87回日獣学会講演要旨集, p. 86.
- 50) Nakagawa, M. ら (1974). *Nat. Inst. Anim. Hlth Quart.*, 14 : 61-71.
- 51) Nakai, T. ら (1984). *Infect. Immun.*, 46 : 429-434.
- 52) Nielsen, J. P. and Rosdahl, V. T. (1990). *J. Clin. Microbiol.*, 28 : 103-107.
- 53) Nielsen, J. P. ら (1990). Proc. 11th Cong. IPVS, p. 55.
- 54) Nielsen, U. (1990). Proc. 11th Cong. IPVS, p. 64.
- 55) Ose, E. E. and Tonkinson, L. V. (1988). Proc. 10th Cong. IPVS, p. 62.
- 56) Oyamada, T. ら (1986). *Jpn. J. Vet. Res.*, 48 : 377-387.
- 57) Pedersen, K. B. and Elling, F. (1984). *J. Comp. Pathol.*, 94 : 203-214.
- 58) Pedersen, K. B. ら (1988). *Vet. Rec.*, 122 : 190-191.
- 59) Pejsak, Z. ら (1990). *J. Vet. Med.*, B37 : 593-598.
- 60) Pejsak, Z. ら (1990). Proc. 11th Cong. IPVS, p. 76.
- 61) Penning, A. and Storm, P. K. (1984). *Vet. Microbiol.*, 9 : 503-508.
- 62) Petersen, S. K. and Foged, N. T. (1989). *Infect. Immun.*, 57 : 3907-3913.
- 63) Petersen, S. K. (1990). *Molec. Microbiol.*, 4 : 821-830.
- 64) Petersen, S. K. ら (1990). Proc. 11th Cong. IPVS, p. 54.
- 65) Pijoan, C. and Fuentes, M. (1987). *J. Am. Vet. Assoc.*, 191 : 823-826.
- 66) Rozengurt, E. ら (1990). Proc. 11th Cong. IPVS, p. 66.
- 67) Rutter, J. M. and Luther, P. D. (1984). *Vet. Rec.*, 114 : 89-90.
- 68) Rutter, J. M. and Mackenzie, A. (1984). *Vet. Rec.*, 114 : 89-90.
- 69) Rutter, J. M. ら (1984). *Vet. Rec.*, 115 : 615-619.
- 70) 阪野哲也ら (1990). 畜産の研究, 44:1405-1406.
- 71) 阪野哲也ら (1991). 111回日獣学会講演要旨集, p. 182.
- 72) 沢田拓士 (1987). 豚病学, 熊谷哲夫ら編, 第3版, pp. 388394.
- 73) 沢田拓 (1989). 動葉畜産資材だより, 診療獣医師特別号, 19:1-9.
- 74) Sawata, A. ら (1984). *Jpn. J. Vet. Sci.*, 46 : 141-148.
- 75) Schimmel, D. ら (1990). Proc. 11th Cong. IPVS, p. 99.
- 76) Schimmelpheening, H. and Jahn, B. (1988). *Dtsch. Tierarztl. Wschr.*, 95 : 257-312.
- 77) Smith, I. M. and Baskerville, A. J. (1983). *Brit. Vet. J.*, 139 : 476-486.
- 78) Sørensen, V. ら (1990). Proc. 11th Cong. IPVS, p. 57.
- 79) Trigo, E. and Pijoan, C. (1988). *Vet. Rec.*, 122 : 19.
- 80) 牛島稔大ら (1989). 第108回日獣学会講演要旨集, p. 133.
- 81) Yamamoto, J. ら (1990). *Microbiol. Immunol.*, 34 : 715-721.

住所：〒180 武蔵野市境南町1-7-1

Mycoplasma hyorhinis が関与した多発性漿膜炎の発生例

鉢須桂一 (埼玉県大宮家畜保健衛生所病性鑑定室)
Hachisu, K. (1991). An outbreak of polyserositis associated with *Mycoplasma hyorhinis*

平成2年1月から平成3年4月までに埼玉県下の3農場において、発育不良を呈した豚の病性鑑定の結果、*Mycoplasma hyorhinis* が関与した多発性漿膜炎と診断したのでその発生概要を報告する。

A農場は、繁殖豚約670頭の一貫経営養豚場で、繁殖農場と離乳後の飼育を行う肥育農場とは約4 km離れ

て位置している。平成元年12月、離乳豚を繁殖農場から肥育農場へ移動後2週目頃から複式呼吸や削瘦が認められ約20%が死亡した。一方、生存した豚は約85日齢までに回復するものの発育は遅延する傾向にあった。B農場は、繁殖豚約1,000頭の一貫経営養豚場で、400頭の一貫飼育が可能なウインドウレス豚舎2棟及び開放豚舎を有している。当農場では、*Actinobacillus pleuropneumoniae* 1型菌が侵入し大きな被害を受け、現在も散発的な発生が認められている。平成2年7月頃より一棟のウインドウレス豚舎を中心におおよそ10%の豚が離乳後から徐々に発育不良となり約70日齢までこの状況が続いた。その中には、呼吸器症状を伴うものも認められた。C農場では、平成3年4月、2腹に異常が認められた。1腹は離乳後全頭が下痢を呈し、他の1腹は離乳前に削瘦し、1頭を残してすべて衰弱死した。

これら3農場計24頭の発育不良豚を材料として病性鑑定を実施した結果、臨床所見では、供試豚のほとんどが被毛粗剛で、一部に軽度の腹式呼吸を伴うものも認められた。

病理、細菌学的検査では、剖検で、14頭に漿膜炎が認められ、その内訳は胸腹膜炎8頭、胸膜炎6頭であった。胸腹膜炎を呈した8頭のうち7頭は *M. hyorhinis* と他の細菌との混合感染であった。その内訳は *Haemophilus parasuis* が5頭、*Streptococcus suis* type2 が1頭、*A. pleuropneumoniae* 1型菌が1頭であった。また、1頭は *H. parasuis* の単独感染であった。胸膜炎を呈した豚6頭のうち *M. hyorhinis* が5頭から分離された。このうち *M. hyorhinis* と他の細菌との複合感染は3頭で、その内訳は *A. pleuropneumoniae* 1型菌が1頭、*A. pleuropneumoniae* 1型菌と *S. suis* type2 が1頭、*S. suis* type4 が1頭であった。

M. hyorhinis の薬剤感受性試験では、すべての分離株がオキシテトラサイクリンに対して高い感受性を示した。タイロシンに対しては2農場由来のほとんどの株が高感受性であったが1農場由来株は耐性であった。

以上の成績から、離乳前後から発生のみられる発育不良豚で、漿膜炎の認められる豚に *M. hyorhinis* が単独もしくは他の細菌と混合感染していることが確認された。このことから、多発性漿膜炎が認められた若齢豚の類症鑑別に *M. hyorhinis* も考慮にいれた対応が必要と考えられる。

住所：〒331 埼玉県大宮市別所町107-1